

『龍龕手鏡』の音韻背景

一、緒論

『龍龕手鏡』について、遼の聖宗、統和十五年（九九七）燕臺（現代の北京）憫忠寺の沙門智光序には概略つぎのように述べる。

釋迦の教えはインドに廣がり、譯されてシナに布教された。梵語の翻譯にあたって、教理を悟るためには言語の正しさが求められる。そこで高士は學の廣大な海を根元まで探り、人の基準ともなる先儒は後進を導く爲には揮って法燈を取り、啓發するためには『隨函』や郭彛を用いた。しかし郭彛はただその名が顯彰されるだけ、香嚴寺は、ただその寺號が示されるだけである。流傳するうちに書寫に間違いが生じてきた。敏達なる者に逢わないことには、この間違いを誰が編修できよう。ここに行均上人が現れたのである。

また、續けて、

行均上人、字廣濟、俗姓于氏、派演青齊、雲飛燕晉、善音韻、閑於字書、觀香嚴之不精、寓金河而載緝。九切功績五變炎涼（行均上人は字が廣濟、俗姓が于氏である。遠く青齊に流れ旅をするかと思えば、燕晉に雲のようにと飛びいくほどに行脚する一方で、音韻に長じ字書に通じていた。香嚴寺（一）での言葉使いの正確でな

いを見て、金河の畔（二）に寓居して載せ集めた。その計り知れない功績には五年の暑さ寒さの歲月をかけたものである。と述べている。

また、宋朝の沈括『夢溪筆談』には「幽州の行均は佛書中の字を集め音韻・注釋を施した。」と紹介している。

これらから判明することは『龍龕手鏡』の編者行均その人が、音韻・字書・注釋に通じていた上に佛書の文字を収集してそれに正俗の別を示し、注音・訓詁を施し敦煌變文などに出現する文書の理解の一助としたというのである。

『龍龕手鏡』が部首「金」から始まることも、あるいは金河の畔に寓居したことも、今は、何か共通する思念があったと類推するだけに留めるが、行均の獨自性、個性には平凡ならざるものがある。

『龍龕手鏡』の辭書編集の配列順序は使用してみると人が想像する以上に便利である。部首が四聲のいずれかが判ると即座にその聲調の部分を取れる。訊ねた部首はもう一度、聲調順に配列される。この第二段階での聲調判断は中國人であってもそれほど簡単な作業ではない。しかし、このような辭典編集の獨創的方法是、その源を顔元孫（？～七一四）の『干祿字書』からヒントを取り、正俗の字體を四聲

によって分類する檢字法を吸収し發展させたかもしれない。しかし『干祿字書』は、部首を四聲に據って分類配列しているわけではない。部首そのものを四聲で配列したところに『龍龕手鏡』の獨自性があり、それが字形の不安定な一語多字形への接近方法として最も實用的な簡便な方法として採り當てるに至った方法である。字形字典に徹すれば、同じ一語が數度に亘ってスペースを取る。その一語多字と言つても部首は大概同一の場合が多いから第一段階の部首のもとに括って掲出する。部首數を聲調別に配列してみると平聲九七・上聲六〇・去聲二六・入聲五八・それに雜一という構成になる。去聲が意外に少ない事も判る。

とは言つても問題はある。張涌泉『敦煌俗字研究』(一九九六)が指摘するように「異體字同部雜出」例えば「門」部入聲の卷一三三葉表(以下一三三aと示す)八行目に「闕」があり、數字を隔てて九行目に再度異體字として登録される例などもある。これは行毎が各種寫本の佛典文字資料編集に際して整理が不十分であったことを示す。

紀昀(一七二四〜一八〇五)『四庫全書總目提要』では「この書は俗體を交え誤謬を含む。だが吉光片羽、幸いにして残っていることは小學家にとつては寶貴なる物なのである」と言い、錢大昕(一七二八〜一八〇四)『潛研堂文集』卷二七、「題跋『龍龕手鏡』全集九所收(一九九七)の項目では、

「日」部に「白」を登録し、「闕」を「門」部に入れたりであつて博引にはちがいないが、我が書籍を汚しているようなものだ。『說文』という指事・象形などの正統的な道は地を拂つて皆無となつてしまつた。

とけなす。これら清朝乾嘉の學者らの見解に對して、羅振玉(一八六

六〜一九四〇)は行均の業績を文字學上の貢獻大なるものとした。羅振玉を受けて浙江學派の潘重規(一九〇八〜)、それに張涌泉までを待つてはじめて、『龍龕手鏡』に對する正當な評價者の出現となつたのである。

このことは『龍龕手鏡』の幸福であつた。しかし、漢字とても言語の一科として扱われなければならないのは言うまでもない。世に行われる言語系統論・字源論いずれもそれには先ずは音韻の定立が求められるのではなかつたか。漢字の背後にいかなる字音が、その背後にはまたいかなる語音が控えているかを考えることなしに文字の正鵠を得た研究が完結するものであろうか。ましてや智光序文には「五音圖式」なるものまでが『龍龕手鏡』卷末を飾つていたことが記され、音韻への考慮もあつたはずであらばこそ。潘重規は『龍龕手鏡新編』(一九八八)引言で『龍龕手鏡』の優れた點を七條上げてその中の第六條に

「本書に引用する佛教教典の書庫の音義はみな宋以前の韻書である。」と述べ音韻への關心を示すが、『龍龕手鏡』の序文の統和十五年は北宋太宗の末年であるからにはこのように言うほかはない。

上記香嚴の引用は全三三例(平聲八・上聲一三・去聲二・入聲一〇)で、この用例だけでとやかく説明する事は控えなければならぬが、「一七a 釜鑿 || 玉篇平鈞反。香嚴音燬。治器」の例がある。玉篇の反切下字の「鈞」は、諄韻、香嚴音の「燬」は青韻、聲符の「坎」は、感韻、「坳」は、青韻。このような反切が許される地方は、その時も即そであつたとは限らないが、今日、「日」部「白」部が交流している晉語などを想定すると解決できる字形問題である。音韻背景を粗略に放置しておいては解決できない問題である。そこで拙論では不十分を

承知の上で『龍龕手鏡』の音韻背景が一體いかなるものか、考察しておいてみようとするのである。

二、方法

本論の各論で、その基本とする方法は、音韻論という辯別素性の有無を手がかりに音素を歸納していく方法、この方法の資料辯別への援用である。特に反切の相承關係から辯別される『龍龕手鏡』の依據反切ならびに固有反切から、本資料の音韻史上の位置づけを試みる。

二、甲

『龍龕手鏡』の音韻系統を明らかにするために先ず辻本春彦『廣韻切韻譜』(一九八六)に倣って「韻譜」を『廣韻』の基礎の上に記入して、この音韻體系の實態をさぐるのである。しかし、『龍龕手鏡』の趣旨は本來俗字の認定であるから常用字・小韻代表字などは必ずしも網羅的に採用登録しているわけではない。しかし、それでもいくらかの行均の依據した方言・韻書などが解明されるのではないか。四、甲の「實態」において『龍龕手鏡』が『切韻』に登録される小韻項目相當をどれほどに登録しているかを見た。そしてその反切の、對『切韻』『廣韻』『玄應音義』『慧琳音義』との比較を試みた。

本來、『龍龕手鏡』を全面的に調査すべきであるが、何らかの傾向性を觀察できるであろうとの豫測から、全等呼に網羅的に完全に分布する山攝を一つの典型と見て、山攝の實態を調査する。また、中國語音韻史上全面的に合流への推移をたどる典型としての止攝について觀察することとした。

山攝で、例えば『廣韻』の韻目、元小韻には「元・原・源・…」と二二字を登録するが、辛うじて「癩」に至ってはじめて『龍龕手鏡』は

この字を登録する。即ち卷一の54bに「語衰反」の反切を見いだす。この反切は、ペリオ二〇一六や『廣韻』韻目の目次に付された反切と同一である。もっとも「元」は、『龍龕手鏡』でも部首であってそこには「愚衰反」とある。こちらは『切韻』原本や『廣韻』元小韻下に示される反切と同一である。これらの例を含めて元韻目では、『切韻』と同一反切四例を認める。『龍龕手鏡』に元韻目字は全部で一一反切あるから、その内の三六%が『切韻』と一致することになる。

同様に『廣韻』韻目、山小韻には「山・疝・…」など三字を登録するが、『龍龕手鏡』四卷四二葉表の「疝」には「音、山」と直音表記だけがある。しかし「山」は『龍龕手鏡』の部首でもあってそこには「所間反」の記入がある。この反切は『切韻』系韻書にあって全て同一である。このようにして山攝・止攝の反切相承表を作成した。このように『廣韻』登録字を『龍龕手鏡』の上に調査して、なお見あたらないものも多く、見あたらない場合には○で示した。

二、乙

錢大昕『十駕齋養新錄』卷十三所收「龍龕手鏡」(全集七)の指摘を待つまでもなく、『龍龕手鏡』の注中に引用される音義類には『舊藏』『新藏』『隨函』『應法師音』『郭注音』『琳法師說』可洪『藏經音義隨函』などがある。ここでは幸いに既に高田時雄『可洪隨函錄』と行瑄隨函音疏』(『中國語史の資料と方法』(一九九四、所收)の詳細な解説と資料があるので、これを利用して行瑄・可洪・『廣韻』・函末・玄應との比較をして、その中では『龍龕手鏡』が何を源泉としているのかを調べる。また、便宜的に用いた『廣韻』が實は『唐韻』に據っているのではないかとの證明をこれら『隨函錄』などの範囲内で試みる。その中で、『龍龕手鏡』独自の音韻推移の有無を調べる。

二、丙

同様に四、丙の實態においては、殘本『唐韻』に山攝入聲は全て存在することに着目して、山攝入聲を例に、『唐韻』『廣韻』反切の一致不一致を調べ、不一致の場合に『龍龕手鏡』はここにいかなる文化的字音の傳統の立場をとっているのであるか、また、その間に紛れ込み浸透する自然的語音の露呈の有無を調べてみた。

三、資料

三、甲

ここでは『四部叢刊續編』を用いる。しかし、問題があるところでは『龍龕手鏡』(一九八五)を参照する。『切韻』の反切については上田正『切韻諸本反切總覽』(一九七五)を利用する。『玄應音義』には上田正『玄應反切總覽』(一九八六)慧琳には上田正『慧琳反切總覽』(一九八七)を利用する。

三、乙

ここでは高田論文『資料と方法』中の表三を活用する。

三、丙

ここでは、清末、蔣斧所收唐寫本天寶一〇(七五二)年修訂殘卷を用いる。実際には上田正『切韻諸本反切總覽』を活用する。

四、實態

四、甲

前述の辻本春彦『廣韻切韻譜』に倣い、山攝・止攝平聲に限り『龍龕手鏡』の反切實態を調査し、配列した。上記のように○は『廣韻』には該當個所に小韻が存在するものの『龍龕手鏡』には出現しないこ

『龍龕手鏡』の音韻背景

とを意味する。また、『龍龕手鏡』固有の特微的反切には@を付して明示する。以下『龍龕手鏡』の反切の實態を示す。

四、甲、1

◎山攝一等開口 寒韻

(牙音) (見) 忤||古安反(溪) 軒||苦安反(疑) 犴||五千反

(舌音) (端) 簞||都干反(透) 攤||他丹反

(定) 揮||徒干反(泥) ○

(齒音) (清) 餐||倉安反(從) 淺||昨干反(心) 冊||蘇干反

(喉音) (曉) ○ (匣) 軒||胡安反(影) ○

(半舌) (來) ○

◎山攝一等合口桓韻

(牙音) (見) ○ (溪) ○ (疑) 岨||五官反

(舌音) (端) ○ (透) 湍||他官反(定) ○ (泥) ○

(唇音) (幫) 鈇||北潘反(滂) 番||普官反

(齒音) (並) 盤||步官反(明) 謾||母官反・瞞||莫官反

(齒音) (精) 鑽||子官反(從) ○ (心) 酸||蘇官反

(喉音) (曉) 歡||呼官反(匣) 桓||胡官反(影) ○

(半舌) (來) 緜||落官反

この一等音にはさしたる問題はない。

◎山攝二等開口 山韻

(牙音) (見) 蘭||古顔@反(溪) 慳||客閑反

(疑) 誼||五閑反

(舌音) (知) 譚||陟山反(澄) ○ (娘) 嚙||女閑反

(齒音) (初) 獬||充山反(崇) ○ (生) 山||所閑反

(喉音) (曉) 義||許閑反(匣) ○ (影) 黠||烏閑反

〔半舌音〕(來) 憇||力閑反

〔こ〕こでは牙音(見) 簡||古顔@反の部分(見)が刪韻との交流を示す。

〔初〕彈||充山反は、正齒二・三等の混同であるが、これは『切韻』
『廣韻』とも同一反切状況である。

◎山攝二等 開口 刪韻

〔牙音〕(見) 姦||古顔反(溪) 駟||苦發反(疑) ○

〔唇音〕(幫) ○(滂) 攀||普班反(明) 蠻||莫班反

〔齒音〕(生) 刪||所班反

◎山攝二等合口 山韻

〔牙音〕(見) 鯨||古還@反(群) ○

〔舌音〕(澄) ○

〔喉音〕(匣) ○(影) ○

〔半舌音〕(來) ○

ここでは牙音(見) 鯨||古還@反の部分(見)が刪韻との交流を示す。

◎山攝二等合口 刪韻

〔牙音〕(見) 關||古還反(疑) 瘡||五還反

〔舌音〕(娘) ○

〔齒音〕(莊) ○(生) ○

〔喉音〕(匣) 還||戸關反(影) 灣||烏關反

◎山攝三等開口 元韻

〔牙音〕(見) 榷||居乾@反(溪) 擻||丘言反(群) 趕||乾@

〔疑) 言||語軒反

〔喉音〕(曉) 軒||許言反(影) 薦||於乾@反

ここでは反切下字「乾@」が一回ならず用いられ、既に三等仙韻との
交流が認められる。

◎山攝三等合口 元韻

〔牙音〕(疑) 元||愚袁反・癩||語袁反

〔唇音〕(非) 蕃||方煩反(敷) 旛||芳袁反(奉) 繁||煩(微) ○

〔喉音〕(曉) 填||許袁反(影) 鴛||怨(于) 爰||于元反

◎山攝二等開口 仙韻

〔齒音〕(崇) 滯||士連反

◎山攝二等合口 仙韻

〔齒音〕(莊) 跽||莊員反(生) ○

◎山攝三等開口 仙韻

〔牙音〕(溪) 愆||去乾反(群) ○

〔舌音〕(知) 遭||陟連反(徹) 臆||丑延反(澄) 纏||直連反

〔齒音〕(章) 旃||之延反(昌) 輝||尺延反

(書) 糴||式連反(常) 愴||市連反

〔喉音〕(曉) 嗎||許延反(影) 媽||於乾反(于) ○

〔半舌音〕(來) ○

◎山攝三等合口 仙韻

〔牙音〕(見) 勑||居員反(溪) 檣||丘員反(群) 拳||渠員反

〔舌音〕(知) ○(徹) 剝||丑全反(澄) 椽||直宣反

〔齒音〕(章) ○(昌) 穿||川(船) ○

(常) 端||士@專反・過||市緣反

〔喉音〕(影) 嬾||於權反(于) ○

〔半舌音〕(來) ○

ここでは常母に崇母の聲母が用いられる例が現れる。合口なるが故に
既に正齒二三等音の合流に至ったものか。

◎山攝四等開口 仙韻

〔牙音〕 (見) 甄 || 居延反

〔唇音〕 (幫) 鞭 || 必綿反 (滂) 扁 || 芳連反

〔竝〕 嬖 || 房連反 (明) 𠄎 || 武延反

〔齒音〕 (精) ○ (清) 遷 || 七仙反 (從) ○

〔心〕 鮮 || 相然反 (邪) 次 || 似延反

〔喉音〕 (羊) ○

◎山攝四等合口 仙韻

〔齒音〕 (精) 鐫 || 子泉反 (清) 詮 || 取全反

〔從〕 ○ (心) ○ (邪) 旋 || 似泉反・墟 || 似全反

〔喉音〕 (曉) 頤 || 許緣反 (影) 嬭 || 於緣反 (羊) 沿 || 緣

◎山攝四等開口 先韻

〔牙音〕 (見) ○ (溪) 牽 || 啓堅反 (疑) 妍 || 五堅反

〔舌音〕 (端) 顛 || 丁年反 (透) 天 || 他前反

〔定〕 嗔 || 徒堅反 (泥) ○

〔唇音〕 (幫) ○ (竝) 躡 || 部田反 (明) ○

〔齒音〕 (精) 湍 || 則前反・箋 || 子前反 (清) ○ (從) ○ (心) ○

〔喉音〕 (曉) 祆 || 呼煙反 (匣) ○ (影) 煙 || 伊賢反

〔半舌音〕 (來) ○

◎山攝四等合口 先韻

〔牙音〕 (見) 涓 || 古玄反

〔齒音〕 (從) ○ 相 || 火玄反 (匣) ○ (影) 淵 || 烏玄反

〔喉音〕 (曉) 相 || 火玄反 (匣) ○ (影) 淵 || 烏玄反

山攝では二等重韻が合流した。山韻字音を表現するのに刪韻字を反切下字に用いる例が開合共に存在し、これらはいずれも『龍龕手鏡』固

『龍龕手鏡』の音韻背景

有の反切であった。

C類元韻とB類仙三等韻との合流もある。これらの反切も『龍龕手鏡』固有の反切である。仙韻四等が直音先韻と合流する現象は『龍龕手鏡』には直接は出現しない。

反切相承表から判明することは、『龍龕手鏡』の反切が多くの場合『切韻』と一致するということである。ただし、元韻で『切韻』との一致度が三六%と低く、これと裏腹に『龍龕手鏡』固有度六四%と高まることは、C類元韻とB類仙韻との合流が實際的實質的なものであったことを示す。

四、甲、2

◎止攝二等開口 支韻

〔齒音〕 (莊) ○ (初) ○ (崇) ○ (生) 筴 || 所宜反

◎止攝二等合口 支韻

〔齒音〕 (初) 衰 || 楚危反 (生) ○

◎止攝二等開口 脂韻

〔齒音〕 (生) ○

◎止攝二等合口 脂韻

〔齒音〕 (生) 瘰 || 所追反

◎止攝二等開口 之韻

〔齒音〕 (莊) 蓄 || 側持反 (初) 輻 || 楚持反

〔崇) 荏 || 土之反 (生) ○ (俟) ○

「輻 || 楚持反」の『切韻』反切は元來「楚治反」であったが、高宗(李治六五〇〜六八三)を念頭に避諱改字が行われ『王三』(七〇六)からは「楚持反」となり、『龍龕手鏡』も、これを踏まえた反切となっている。

◎止攝三等開口 支韻

〔牙音〕 (見) 羈||居宜反(溪) 敝||去奇反

〔群〕 ○ (疑) 宜||魚奇反

〔舌音〕 (知) ○ (徹) 螭||丑知反(澄) 馳||直知反

〔唇音〕 (幫) 跛||彼爲反(滂) 鉞||普支反

〔竝〕 皮||符羈反(明) 糜||美爲反

〔齒音〕 (章) 支||章移反(昌) 眇||叱支反

〔書〕 純||式之@反(常) 翹||是支反

〔喉音〕 (曉) 穢||許宜反・突||許羈反(影) 漪||於支反

〔半舌齒音〕 (來・日) ○

〔純||式之@反〕では、支・之韻の交流現象がある。

◎止攝三等合口 支韻

〔牙音〕 (見) 嬌||居爲反(溪) ○ (疑) ○

〔舌音〕 (知) ○ (澄) 錘||直追@反

〔齒音〕 (昌) 吹||昌爲反(常) || ○

〔喉音〕 (曉) 嚳||許爲反(影) 透||於爲反(于) ○

〔半舌齒音〕 (來) 羸||力爲反(日) ○

〔錘||直追@反〕では、支・脂韻交流を示す。

◎止攝三等開口 脂韻

〔牙音〕 (見) 肌||居夷反(疑) 狝||疑@

〔舌音〕 (知) 砥||丁尼反(徹) 絺||丑尼反

〔澄) 墀||直尼反(娘) 尼||女夷反

〔唇音〕 (幫) ○ (滂) 丕||疋悲反(竝) 邳||符悲反(明) 徹||莫悲反

〔齒音〕 (章) ○ (昌) 鴉||昌脂反(書) 尸||式脂反

〔半舌〕 (來) 鰲||力脂反

「狝||疑@」では、脂・之交流を示す。砥||丁尼反は聲母は異例であるが、『廣韻』も同一反切である。

◎止攝三等合口 脂韻

〔牙音〕 (見) 龜||居追反(溪) ○ (群) 逵||渠追反

〔舌音〕 (知) ○ (澄) 椎||直追反

〔齒音〕 (章) ○ (昌) 摧||昌佳反(常) ○

〔喉音〕 (于) 帷||于悲反

〔半舌齒音〕 (來) 灑||力追反(日) 蕤||儒佳反・如佳反

◎止攝三等開口 之韻

〔牙音〕 (見) 基||居之反(溪) ○ (群) ○ (疑) ○

〔舌音〕 (徹) 痴||丑之反(澄) ○

〔齒音〕 (章) ○ (昌) 熾||赤之反(書) ○ (常) ○

〔喉音〕 (曉) 僖||虛之反(影) 醫||於其反

〔半舌齒音〕 (來) 狸||力之反(日) ○

◎止攝三等開口 微韻

〔牙音〕 (見) 機||居依反(群) 畿||渠希反(疑) 沂||魚衣反

〔喉音〕 (曉) ○ (影) 衣||於希反

◎止攝三等合口 微韻

〔牙音〕 (見) ○ (溪) ○ (疑) ○

〔唇音〕 (非) ○ (敷) 靄||芳非反(奉) 肥||父非反・範||扶非反

〔徹) 微||尾非反

〔喉音〕 (曉) ○ (影) ○ (于) □||兩非反

◎止攝四等開口 支韻

〔牙音〕 (群) 示||巨支反

〔唇音〕 (幫) ○ (滂) ○ (竝) 蟬・郵||符支反(明) ○

〔齒音〕(精) 貫||即移反(清) 雌||此移反

(從) 疵||疾移反(心) ○

〔喉音〕(曉) ○(羊) 移||羊支反

◎止攝四等合口 支韻

〔牙音〕(見) 規||居隨反(溪) 闌||犬規反

〔齒音〕(精) 睡||子垂反・蕊||姉隨反・厘||姉宜反

(心) 眭||息爲反(邪) ○

〔喉音〕(曉) 陸||許規反(羊) 隋||悅吹反

◎止攝四等開口 脂韻

〔牙音〕(群) 靚||渠脂反

〔唇音〕(滂) 紕||疋夷反(竝) 芘||卑

〔齒音〕(精) 資||即移@反(清) 鄴||取私反(從) 茨||疾資反

(心) 厶||息夷反

〔喉音〕(曉) 唄||喜夷反(影) ○(羊) 羸||以脂反

〔資||即移@反〕では、脂・支交流現象がある。

◎止攝四等合口 脂韻

〔牙音〕(群) 葵||渠維反

〔齒音〕(精) 唯||即佳反(心) ○

〔喉音〕(曉) 隹||許維反(羊) 墻||以追反

◎止攝四等開口 之韻

〔牙音〕(溪) ○

〔齒音〕(精) 滋||子之反(從) ○(心) ○(邪) ○

〔喉音〕(羊) 飴||以之反

止攝のまとめ

その都度ふれてきたが支・之合流、脂・之、脂・支合流の現象が観

『龍龕手鏡』の音韻背景

察された。微韻と他の止攝B類三等との交流はあからさまには存在しない。ただし、反切相承表では止攝の支・脂・之韻が『切韻』との一致でほぼ六〇%を占めるのに對して、微韻では二八%であった。C類のB類接近を果たした『慧琳音義』とは四三%の親近性があるとは言える。

支韻「郫」の音には、『廣韻』に三等符羈反「蜀の縣名・四等符支反「晉の邑」の二種類がある。『王三』では、三等韻のものだけで四等韻の方は登録しない。ところで『龍龕手鏡』では三36bに「符支反、晉邑。又音皮、縣名」とあって重紐を記録する。

四、甲の總括

上記のように、『龍龕手鏡』では、これらの文字が多くの場合、著しく日常言語から隔たる人爲的性格を有することも關連してか、その反切の多くを『切韻』に依存していることが判明した。また一方、既に『慧琳音義』によって證明されているような、唐代中期以降の音韻推移をも反映していることが判った。また、山・止攝ではないが、河野六郎「唐代長安音に於ける微母について」(『河野六郎著作集2』一九七九)で指摘する侯韻明母の字「茂」が『慧琳音義』において「莫布反」と模韻の反切下字をとるといふ秦音的特徴が『龍龕手鏡』にもそのまま許容されて現れるということは注目すべきこととしなければならぬ。即ち流攝一等去聲二29a「茂」には「莫候反」の反切に加えて、遇攝一等「莫布反」の反切もある。⁴⁾

四、乙

嘉定錢大昕全集七『十駕齋養新錄』卷十三『龍龕手鑑』で元來「手鏡」であったものが「手鑑」と改まっているのは宋人が廟諱(即ち宋の太祖趙匡胤の祖父、趙敬の「敬」と「鏡」が同音であることを避けた

反切相承表
(山攝)

韻書 \ 韻目	寒垣	刪	山	元	仙	先
『切韻』小韻	32	14	20	14	50	23
『手鏡』登録	22	9	11	11	34	13
『切韻』と一致	9	5	8	4	17	5
	42 %	56 %	73 %	36 %	50 %	38 %
『廣韻』とのみ一致	1	1	0	0	1	4
『玄應音義』と一致	4	3	0	1	5	3
『慧琳音義』と一致	6	5	2	1	8	4
『手鏡』固有	7	1	2	7	9	3
	32 %	11 %	18 %	64 %	26 %	23 %

反切相承表
(止攝)

韻目 \ 韻目	支	脂	之	微
『切韻』小韻	55	42	25	15
『手鏡』登録	39	33	11	7
『切韻』と一致	23 (59 %)	18 (55 %)	7 (63 %)	2 (28 %)
『廣韻』にのみ一致	2	4	1	4
『玄應音義』と一致	0	2	4	3
『慧琳音義』と一致	9	5	4	3
『手鏡』固有	10 (26 %)	9 (26 %)	0	1 (14 %)

からであると言い、注中の引用書・音義類を指摘する。この指摘を更に本格的に追究したのが『中國語史の資料と方法』(一九九四)中の論文、高田時雄『可洪隨函錄と行瑠隨函音疏』である。同論文の表二佛典音義關連年表などに従えば、

六六一(龍朔元)頃 玄應「大唐業經音義」

八〇七(元和二) 慧琳音義成書

九四〇(後晉天福五) 可洪「隨函錄」成冊

一〇世紀前半 行瑠「大藏經音疏」

函末 その祖本は唐末五代江南諸藏卷末

である。高田論文も可洪『隨函錄』三十冊は、高麗藏本で今日に伝えられるがなにごん膨大であると述べるし、またそもそも『資料と方法』該書の意圖が後學への指標呈示を旨指しているのだから、限定された部分の扱いになるのも當然であろう。しかし本論は、ここに提出された『摩訶僧祇律』の最初十卷分を「表三反切對照表」としたものを利用して『龍龜手鏡』との相關關係を見た。直音は除外するとして、『龍龜手鏡』の反切の字面上の同一例は

手鏡と同一反切數(總數) %

行瑠 三十一 (百五十九) 十九

可洪 三十四 (百六十一) 二十一

廣韻 六十三 (百八十六) 三十四

函末 二十 (七十六) 十三

玄應 二 (四十五) 〇

(總數) は前掲表三に出現する各資料中の反切總數である。その總數中でいくつの反切が『龍龜手鏡』の反切と同一であるかを示した。これで見ると『龍龜手鏡』の反切の源泉は『廣韻』が多くを占めること

『龍龜手鏡』の音韻背景

が判明する。

また、採用率を『廣韻』を一〇〇としたとき、可洪四七・行瑠四一・函末六の割合となる。『手鏡』の反切の原點にほぼ見當がつく。『廣韻』から多くを採用し、行瑠・可洪からそれぞれ同じくらいの割合でくみ取ったのである。

高田論文では「隨函」のうち『手鑑』出處の經名を出してあり、可洪『隨函錄』と比較し得るものについて調べたところ、遺憾ながらすべて合わない。『手鑑』所引「隨函」は當面、可洪の『隨函錄』ではないと考えるべきである」と述べる。この點から高田論文表三の反切を見ると、可洪の次の反切、

三四〇b 跋 七六反・三三三b 磔 張格反・二六二a 翻 行革反

これらは『切韻』でも『玄應』『慧琳』でもなく、全く『龍龜手鏡』とのみ一致する。

また、三六三a「凸」田結反「三四〇b」跋「蒲末反」のように慧琳反切と可洪・『龍龜手鏡』のみが一致するということもある。

高田論文がそのような便宜的な『廣韻』で切韻系統を代表させているのであるが、本論では残存『唐韻』にかかわるものが「表三反切對照表」内で、いかほど『廣韻』と同一となるかを見たところ、四三%が大いに見ていたのではないか。限定のある推論ではあるが。

高田論文が指摘する行瑠・可洪にも見られる切韻系反切から音韻史上一步推移したと見られるものとした反切を『龍龜手鏡』に照らしてみると、

①『龍龜手鏡』固有反切「紡」夫網反の例で、この聲母は非母である。これは『廣韻』が、「妃兩切」として敷母であるのとは異なる。

これは非母・敷母ともに既に唇齒音であることの證明である。

②行滔・『龍龕手鏡』共通の反切に（また慧琳でも「旨・陋」の項目に同一反切で現れるが）「陷||咸鑑反」がある。そもそも『廣韻』では「陷」は陷韻であるから、これは二等重韻の交流を示す。

このように「表三」中にある『龍龕手鏡』特有の音韻推移を示すものは、これだけであって多いとは言えないが重要ではある。

四、乙の總括

「表三」の資料によっても、『龍龕手鏡』の反切には多く『廣韻』（それは正確には高田論文が言うならかの『切韻』）により、また、時には可洪のみにより、というようにして慧琳段階に見る二等重韻の交流などの推移があったと言える。

四、丙

見てきたように四、甲反切相承表でも『廣韻』とのみ一致する『龍龕手鏡』反切があり、四、乙でも、参照される『廣韻』の反切が、『龍龕手鏡』反切との同一反切率において他の可洪らを抜いて最も高かった。しかし、そこでの『廣韻』の『唐韻』との一致率は豫想を下回って四三%に過ぎなかった。（尤も『廣韻』の又切が本地の反切と必ずしも同一でない場合も多々存在するが）

言うまでもなく『龍龕手鏡』反切は、それよりも後に出現する『廣韻』を利用できるはずがない。それでは『廣韻』に代わる韻書が『唐韻』である確率はいかほどであったかについてももう少し拘ってみたい。僥倖にも残る殘本『唐韻』から、四、甲において山攝を取り上げたので、ここでも『龍龕手鏡』の山攝入聲の音韻の源泉は何かを探る。

前述のように音韻論の方法の一つに辯別素性の有無を手がかりに音

素を確定する方法がある。これを援用して、『龍龕手鏡』に『唐韻』『廣韻』の反切と一致する反切が存在すれば+、存在しなければ-とすれば、その組み合わせは、

- ア、+ 『唐韻』 + 『廣韻』（傳統繼承）
 - イ、- 『唐韻』 - 『廣韻』（手鏡）個性
 - ウ、+ 『唐韻』 - 『廣韻』（唐韻）寄り
 - エ、- 『唐韻』 + 『廣韻』（廣韻）寄り
- となる。

ア・ウの場合、『龍龕手鏡』は『唐韻』を見ていたことになろうし、イの時は『龍龕手鏡』固有の特徴を示すであろうが、エの場合は『廣韻』がかえって『龍龕手鏡』に登録された類の資料を汲んでいと言ふことになろうか。

一等

◎末韻

末韻には三十三小韻がある。そのうちで

『唐韻』に登録しないもの四韻。

ア『唐韻』『廣韻』一致二十一小韻七十二%。不一致五小韻十五%。

この不一致のうち、

イ『龍龕手鏡』の反切明母三35b「𦵑||亡發反」、竝母四40b「𦵑||蒲末反」定母三49b「達||徒葛反」は、『切韻』『唐韻』『廣韻』いずれにも登録しない『龍龕手鏡』固有のものである。

ウ『唐韻』に一致するもの端母の一韻二6b「撥||多括反」。

エ『廣韻』に一致するもの透母の一韻一13b「悅||他括反」がある。

○『唐韻』『廣韻』との一致率が高いのは當然である。エがここにも出現する。特筆すべきは『龍龕手鏡』に、いずれも同音の端母開口に

所屬する異種の文字に對して「當葛反」二例・「多葛反」・「當達反」・「丹葛反」・「當割反」それぞれ一例という多種の反切が登錄されていることである。このうち「當割反」の反切は、『唐韻』では反切下字が不明であるが、『廣韻』までの切韻系諸本と同一である。ここはあるいは反切上下字の選擇が傳統に束縛されない自由さを持っていた部分とも考えられる。

二等

◎ 錯 (刪) の入聲

開合全體で二十三小韻があるうち『唐韻』にない四韻、『廣韻』の點韻への移動分二韻を除外すると一七韻、うちア『唐韻』『廣韻』が一致するもの一五例八八%。『唐韻』『廣韻』(點韻への移動分も含めて)不一致なるもの四例二八%。

この不一致の内譯は①『唐韻』の誤寫②『廣韻』では既に點(山の入聲)韻への移動分、娘母開口「療」・曉母合口「詒」の二韻③字面上の不一致の明母「昧」の一韻である。

では『龍龕手鏡』はいずれを支持するか、親近感があるのか調査すると

②について、イ娘母のもの三44a「療」は「奴葛反」と一等とし、エ曉母合口のもの三27a「詒」は『廣韻』の點韻「僭」と同じ反切「呼八反」として出ている。

③イ明母一48a「昧」は『唐韻』『廣韻』とも異なり「莫八反」で點(山の入聲)韻に入る。

このほかエ崇母「𦉳」の反切「查錯反」は全ての『切韻』系韻書中に登錄せず『廣韻』に至って始めて登錄したものである。

○ここでも基本的には『唐韻』『廣韻』同一線上にある。しかも③明

母の例のように『龍龕手鏡』は獨自に二等重韻相互の交流を始めていた點についてはまちがいない。

◎ 點 (山) の入聲

全小韻二十一例中『唐韻』に所載しないもの二例、『唐韻』『廣韻』一致するもの十七例八十九%である。並母・明母・娘母・疑母などに用いられる反切は『切韻』『唐韻』『廣韻』いずれとも同一反切である。ここでは諸本に異動がない。このように相互に二等重韻でありながら一方の錯韻では移動が激しく一方の點にはそれが無いというところはあるいは文字資料整理分擔者が異なっていてその個性が露呈したというところもあるうか。

◎ 月韻

月韻には十七小韻ある。うち『唐韻』に所載しないもの二例。この二例を除く十五小韻のうち『唐韻』『廣韻』一致のもの十二例八十%である。不一致の内、『唐韻』誤寫一例を除外して、『唐韻』『廣韻』不一致は三例ある。これもいずれも字面上の差異に過ぎないが、

①ウ見母開口「一8a 鋤・一55a 羯・二61b 趨」居謁反」は切韻諸本や玉本と同一、『廣韻』と字面上の差がある。

「手」切・王・唐

②イ疑魚母開口「一8a 𦉳」は「語謁反」で王三とのみ一致する。「手」王三

③エ『廣韻』とのみ一致するもの曉母開口三5a「歌」許謁反」がある。「手」廣

このほか問題となるのは『唐韻』『龍龕手鏡』『廣韻』の親近性を暗示する次の例である。『切韻』が影母合口に重出させる「噉」乙劣反「嬰」於月反」のうち前項には王三に注釋がある。「此字亦薛部」とあ

るものである。『龍龕手鏡』では二36b「噉||於月乙劣二反、逆氣也。又呼外反、鳥聲也」としている。『唐韻』『廣韻』ではこれらを分けて噉月韻・噉薛韻としその反切も同じに登載し「手||唐・廣、噉泰韻では『龍龕手鏡』固有の「呼會切」とする。即ち

王三 唐韻・手鏡・廣韻

〔月〕噉||於月反 〔月〕噉||於月反

〔月〕噉||乙劣反 〔月〕噉||於月反

〔薛〕噉||乙劣反 〔薛〕噉||乙劣反

となるであろう。

○③エの項目が問題であるが、他はみな『唐韻』以前の反切を踏まえている。

三四等

◎薛韻

小韻總數五二であるがそのうち『唐韻』『廣韻』ともに不登載二小韻、『唐韻』不登載七小韻。うち『廣韻』の屑韻に移動したものの一小韻。存疑一小韻。これらを除いた四二小韻のうち『唐韻』『廣韻』一致のもの三七韻八八%。『唐韻』『廣韻』不一致のもの「敝・覽・筋・折」の四小韻である。この四韻のうち、

①エ『龍龕手鏡』で一42b「敝||丑悅反」とある反切は『廣韻』と同一。

②ア『龍龕手鏡』の三2a「覽||芳滅反」は、『切韻』『廣韻』と同一。

③イ『龍龕手鏡』幫母三等三17b「筋||彼別反」は、『唐韻』『方列反』『廣韻』『方別切』である。これは「方」が輕唇音化してしまつたためにそれを避けて、非輕唇音字「彼」を用いている可能性もある。

④「折」は『龍龕手鏡』にない。

このほかの問題には、次の例がある。
iiイ『廣韻』では屑韻に移動して反切「普蔑切」となる(『切韻』薛韻の並母四等の)「噉」は、『龍龕手鏡』では二40a滂母四等「普結反」で、『廣韻』と同音となり、本来の滂母三67b「ノ||普蔑反」とともにみな「屑韻」との交流現象を示す。

iiiイ「拙」小韻は『切韻』『廣韻』にない、『龍龕手鏡』固有の二6a「征悅反」であるが單に字面上の相違に過ぎない。

iiiiイ「啞」は、切韻系では「女劣反」であるが、『龍龕手鏡』は「訥」の通字と認めているらしく二37b「奴骨反」としている。

○『唐韻』『廣韻』に本質的差異はない。『龍龕手鏡』で薛韻四等と屑韻との合流がある。

四等

◎屑韻

屑韻には二四小韻がある。このうち『唐韻』不明が一例。残る二二三小韻のうち『唐韻』『廣韻』反切が一致するもの十九例八三%。不一致四。この不一致は字面上のもの。この不一致を『龍龕手鏡』に確認すると、『龍龕手鏡』固有のものに三例、三10a曉母合口「血||呼決反」、二6b影母合口「抉||伊決反」、二6a滂母「撤||普滅反」がある。この最後の反切下字「滅」は薛韻四等であるから、ここに屑薛兩韻の交流が認められる。三40a並母「釐||蒲結反」では「手||切・王・廣」の場合が見られる。

四、丙の總括

1、①ここでは『唐韻』『廣韻』の反切字種の一致度が末韻で七十二%、二等錯韻で八八%・點韻で八九%、三等月韻で八〇%、三四等薛韻で八八%、四等屑韻で八三%と極めて相關關係が深いことが判明す

る。即ち、字音傳統資料として『龍龕手鏡』は『唐韻』を活用していた可能性が高いと見てよい。従って平聲のように『唐韻』にその該當個所が現在存在しないところにあってもこの関係の深さのあったことは容易に類推することができる。

1、②王國維はその『觀堂集林』で殘本『唐韻』が『唐韻』たることの證明に大徐本『說文』反切と一致していることを挙げる。それは『廣韻』「恭」字の注に「陸以恭蝮椽等入冬、均非也」に示す「恭・蝮・椽」の扱いに關して『唐韻』が最初に「冬」韻から「鍾」への變更を加えたこととまさしく一致しているというのである。それでは『龍龕手鏡』はどうなのか。「恭」は登載しないが、二九 a 「蝮||息恭反」三11 a 「椽||即容反」とあり『唐韻』とも『廣韻』とも一致するのである。

同様に王國維は殘本『唐韻』「麥」韻の「𪛗」字の下の注に、「陸入格(陌)韻」と記入されていることを指摘する。この「𪛗」の字は、『龍龕手鏡』では一50 b 「古厄反」とし、『唐韻』『廣韻』の「古核反」と字面上は異なるものの同じく「麥」韻に屬せしめている。

この面でも『龍龕手鏡』が『唐韻』『廣韻』との親近性を示し、一方梗攝二等重韻の交流、辯別素性の消滅時代を迎えた段階を暗示しているであろう。

2、上記のように梗攝二等重韻は交流し、四等辟韻と屑韻との交流も發現した。これは『龍龕手鏡』が語音變化の露呈を書き留めた事を意味する。

五、結論

『龍龕手鏡』の實態を三方面から調査した。『龍龕手鏡』の編修の發

『龍龕手鏡』の音韻背景

想、音韻背景は何れに原點を見いだしたらよいのか。

1、異體字書集輯の流れを汲む

高田論文は漢中比丘可洪述『大藏經音隨函錄後序』に着目して「或有統括眞俗、類例偏傍、但號經音、不聲來處。」を「正字俗字を取り混ぜて、それを偏傍によって分類しながら、經音を注記するだけで出處を示さないような書物もある」その割り注として「即郭逵及諸僧所撰者也」とあることから逸書であるが、開成五年(八四〇)慧琳音義の顧齊之「新收一切經經音義序」に言う「太原郭處士」即ち、可洪序に言う「河東博士」の郭逵「新定一切經類音」は通例の音義書の體例ではなく、字書體のものであったと言う。

智光序文にも郭逵が明示され、また本文中にも郭逵反切が實際引用されている。『龍龕手鏡』に郭逵式字書編修の方針即ち佛典用字の偏傍による辭書編修を踏襲している面があつて當然と考へて良い實態がある。

2、隨函的注釋方法を汲み、かつ、同一部首聲調順配列を創出

『慧琳音義』をひもとくと卷九九、二葉裏に「嘖吼」の熟語があり、それに慧琳は「上徂鸞反下吾骨反。・高銳貌也」のように、熟語全體に注音意義する。この方式は『龍龕手鏡』でも踏襲して一24 a 「嘖吼、上在丸反、下五官反。山峻銳貌」とする。このように雙聲疊韻の熟語は部首も同じ、聲調も同じという場合が多く、『干祿字書』(七一四)の存在もあり、勢い『龍龕手鏡』では聲調で整理する便利を發見するに至つた。

たとえ雙聲疊韻の場合でなくても、注義中の語に一一拘って注音していく態度、例えば二43 b 「馳||直知反。驚也。走也。奔也。驚音務」このマニアック的態度がしばしば見られるのは、このような「隨

函」式傳統、就中慧琳の影響の中に強く位置づけられていたことが想像される。

同様に『慧琳音義』卷九二の六葉には「網繆」「上宙留反。毛詩傳云網繆猶纏綿也。說文從糸周聲。下美憂反。說文云繆、臯之十潔也從糸彖力救反。潔音結。」とある。慧琳は『玉篇』と『說文』からこの注釋を構成し、音注部分は獨創性を發揮して、諧聲聲符にまで反切を施す。音注マニアである。これに對して『龍龕手鏡』では三18aに、「網||音紬。網繆也。又纏束也」。續けて「繆」に通字と共に正字であることを示して「美幽反。網繆。又纏也。又音繆。紬||也。又音目」とする。

3、これら上記1・2を背景として普通語圏内に身を置きながら、『唐韻』と重なること最も多いなんらかの『切韻』を基準に音注を施し、一方現實の音韻推移も、秦語をも採録した。ことなどを結論としたい。

付記

最後に逸名『四聲等子』の序文に「切韻之作、始乎陸氏、關鍵之肇自智公。」と言ひ、「近龍龕手鏡重校、類編于大藏經函帙之末、慮方音之不一、唇齒之不分。既類隔假借之不明、則歸母協聲、何由取準、遂以附龍龕手鏡之後」(近頃『龍龕手鏡』を重ねて校訂し、大藏經の函帙末に類似したものとして配列した。方言音の多様性や唇齒音などの區別のはっきりしないことに配慮したのである。また、類隔・假借がはっきりしないからには、音韻の基準は何に據るのか。そこでとうとうこの『四聲等子』を『龍龕手鏡』の後ろに附けた)と書いている點についてである。

趙蔭棠は『等韻源流』(商務印書館、一九五七)の「北派等韻」において、『四聲等子』は、『五音圖式』とは小異はあるにしても必ず大同であると考へる。張世祿『中國音韻學史』(一九六八)で、これは推測であつてまだ確信することはできないと述べる。『中國語言學要籍解題』(一九九二)では、元代以前に生まれたものと言ひ、『中國學術名著提要』(一九九二)では、『四聲等子』の著作年代を、『集韻』(一〇三九)の後『切韻指掌圖』(一二〇三)の前のものとする。

『四聲等子』が即『五音圖式』であるか、否かについては、一に『龍龕手鏡』の内容吟味に係かっている。即ち『四聲等子』が攝ごとの末行に斷る①「東冬腫相助」②「蕭併入宵類」③「江陽借形」④「魚虞相助」⑤「幽併入尤韻」⑥「佳併入皆韻」⑦「祭廢借用」⑧「文諄相助」⑨「刪併山・先併入仙・仙元相助」⑩「内外混等」⑪「四等全併」⑫「獨用孤單韻」などの實態が『龍龕手鏡』にも見いだすことができるかという点である。⑫には「站」「怎」など明らかに『龍龕手鏡』に登載せず、『四聲等子』成書後の狀況混入の部分もある。「實態甲」で見たように⑨の實態はすでにその萌芽がみられた。字書的注音の『龍龕手鏡』本文では傳統の反切に従い保守的な態度をとり、音韻推移の現状を示すために『韻鏡』的な『四聲等子』を付けた。だからまた、書名にも『手鏡』が入っているのではないか。後に『字彙』が「韻法直圖」を付録するように。

注

(1)「香嚴」が寺名か僧名かは、問題がある。『龍龕手鏡』にも、卷一の十五葉の裏に、「譚||陟山・他干二反。一謾。欺謾言也。香嚴又丑山反」などある場合である。これが序文からは寺號であるので、寺門固有

の讀法が傳承されていたと理解するのが良いであろう。『廣韻』では①「寒一韻に「他干切」②「山」韻に「陟山切」とあり、最も正しいものは「謾」との疊韻からは①がよいはずであるが、香嚴寺では有氣音の二等音に讀む。

(2) 張涌泉は、『敦煌俗字研究』(一九九六)で、五臺山金河寺と言うが、本人に訊ねたところ根據は別にないとのことであった。太原の人に訊ねると、今日でも呼和浩特市の市民同士の交流も盛んであり、同市の南を黄河に流入する金河周邊には晉語圏に屬する住民も多いとのことである。

(3) 『四部叢刊續編』所收『龍龕手鑑』上海涵芬樓景印江安傅氏雙鑑樓藏宋刊本・『續古逸叢書』(江蘇古籍出版二〇〇一)にも所收。高麗版影印底本『龍龕手鏡』(中華書局一九八五)

(4) 慧琳四の六では「茂||莫候反。吳楚之音也。韻英音爲模布反」とある。

参考文献

- 張世祿『中國音韻學史』中國文化叢書(商務印書館一九六八)
錢曾怡等編『中國語言學要籍解題』(齊魯書社一九九二)
『中國學術名著提要』胡裕樹主編(復旦大學出版社一九九二)
河野六郎『河野六郎著作集2』(平凡社一九七九)
辻本春彦『廣韻切韻譜』(均社一九八六)
上田正『玄應反切總覽』(汲古書院一九八六)
上田正『慧琳反切總覽』(汲古書院一九八七)
潘重規『龍龕手鑑新編』(中華書局一九八八)
高田時雄『中國語史の資料と方法』
(京都大學人文研究所一九九四)
張涌泉『敦煌俗字研究』(上海教育出版社一九九六)
嘉定錢大昕全集全一〇卷(江蘇省古籍出版社一九九七)

『龍龕手鏡』の音韻背景

望月眞澄「慧琳音義所據之字書說」(神奈川大學言語研究一九九九)

鄭賢章『龍龕手鏡』闕失略論』(古漢語研究二〇〇一の四期)

◎本稿の甲の部分は二〇〇一年九月二五日中國杭州での國家教育部開催「第二回中古漢語國際學術研討會」席上發表したものに手を加えた。